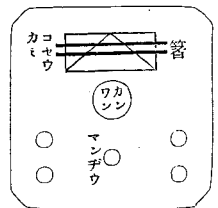


前



まんぢうのこきり物、二色一色にても不苦候、此を汁へ可入、但入候はぬも不苦候、若き人などは、入候はぬも能候、年寄はかうのものなどを、さいのやうに、まんぢうにくひそへたるも能候、若人はゆめく、有べからず、

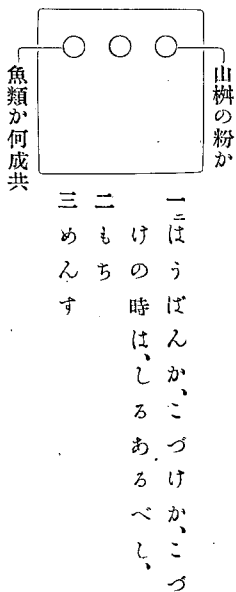
〔庖丁聞書〕一點心の時出る湯薬は、湯にてもまた酒にても飲事あり、貴人へは盆に天目をすへ、薬を包、檜の茶匙をそへ出す也、相伴へは薬を直にてんもくに入、茶匙を組付、二ツ三ツくみ付持出、引おとしにして、跡より湯を引也、略、○中

一點心の粉 胡椒 杏仁 山椒 右等分細末し、かはらけにもる也、

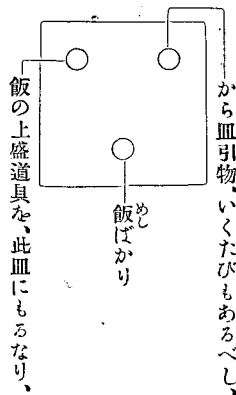
〔真順故實聞書條々三〕一點心の時、汁にすりこ候、其を汁に入候事勿論候、但若衆などは入候はぬが能候歟、又再進の汁を請て、其にもすりこを入候事、悪敷候、一番計入候也、

〔甲陽軍鑑十六品第四十四〕三ツ點心之次第

酢菜
すなひか



芳飯の事常よりめづらしき仕立なり



飯の上盛道具を、此皿にもるなり、

〔成氏年中行事〕一公方様御發向事、○中 天下有御靜謐、建長寺爲始、諸五山へ公方様ヲ請被、申、薬師